ツタンカーメン王墓の「あの壁」の向こうに
――アマチュア・エジプト学ファンの楽しみ

札幌市医師会
札幌孝仁会記念病院
寒河江　悟（さがえ　さとる）

古代エジプト文明には以前から興味があった。ピラミッド、ファラオ、ヒエログリフ、そして「死者の書」。何千年も前の人々が残したものが、なぜこれほど現代人を惹きつけるのだろう。私のエジプト熱が本格的になったのは、2022年頃からテレビでエジプト関連の番組を頻繁に見るようになってからである。特に河江肖剰先生の解説が面白く、番組を録画しては楽しんだ。やがてシャンポリオンによるヒエログリフ解読の物語にも興味が広がり、トマス・ヤングとの関係、ロゼッタ・ストーン、さらには日本のエジプト学者の著書など、次々と読み始めた。

そして2024年の正月、ついに念願のエジプトを訪れた。カイロからルクソールへ。カルナック大神殿、ルクソール神殿、ハトシェプスト女王葬祭殿、王妃の谷、そして王家の谷。写真や映像で何度も見ていた景色の中に実際に立ってみると、その印象は全く違った。

なかでも忘れられないのが、ツタンカーメン王墓（KV62）である。

1922年、ハワード・カーターが発見したあまりにも有名な墓である。豪華な黄金のマスクをはじめ、膨大な副葬品が発見された一方で、実際に墓に入ってみると意外なほど小さい。「これが、あのツタンカーメンの墓なのか」と少々拍子抜けしたことを覚えている。

ところが今、その「小ささ」が再び世界の注目を集めている。

2026年９月、科学誌『Nature』に興味深いニュースが掲載された。最新の地球物理学的調査によって、ツタンカーメン王墓の壁の先に、これまで知られていなかった回廊や部屋が存在する可能性が改めて浮上したというのである。

この話には前史がある。2015年、英国のエジプト学者ニコラス・リーブスは、ツタンカーメンの埋葬室の北壁などを詳細に検討し、壁の向こうにさらに部屋が存在するのではないかという大胆な仮説を発表した。しかも、その奥に眠っている人物として彼が考えたのが、あのネフェルティティであった。アクエンアテン王の妃であり、有名な胸像によって古代エジプトを代表する女性となったネフェルティティ。しかし、その墓は現在まで確定していない。もしツタンカーメン王墓が、もともと別の王族のために造られたもっと大きな墓であり、若くして急死したツタンカーメンのために手前の部分だけが転用されたのだとしたら――。そして、その奥に本来の墓が残されているとしたら――。考えただけでも胸が躍る。

もっとも、科学はそう簡単ではない。その後の地中レーダー調査では、壁のすぐ裏に空洞はないという結果も出て、ネフェルティティ説はいったん後退した。ところが2020年には、墓の近くに長さ10メートル以上と推定される未知の空間が報告された。そして今回の2026年の調査では、地中レーダーだけでなく、地下のわずかな密度差を測る「微小重力探査」という方法が加えられた。その結果、人工的な構造物を思わせる低密度領域や直角状の構造が見つかったという。さらに面白いのは、「壁のすぐ裏に空洞がある」という単純な構造ではなく、壁の先には瓦礫で埋められた回廊があり、そのさらに先に部屋が存在するのではないか、という新しい解釈である。

ここで私は、数年前の自分を思い出してしまった。私は、まさにその墓の中にいたのである。

観光客の一人として何気なく眺めていた「あの壁」。もしその向こうに、三千年以上にわたって誰にも開かれていない回廊があり、さらにその先に王族の墓が残っているとしたら。そして、そこにネフェルティティが眠っているとしたら……。もちろん、現時点では何一つ証明されていない。地下に人工的な空間があることと、それが墓であることは同じではない。まして、それがネフェルティティの墓であるという証拠はまだない。研究者たちも慎重である。しかし、だからこそ面白い。研究チームは、文化財を傷つけないよう直径数センチほどの小さな穴を開け、そこからカメラを入れて内部を調べる方法を検討しているという。もし実現すれば、私たちは近い将来、三千年以上閉ざされてきたかもしれない空間を初めて目にすることになる。

エジプト旅行から帰っても、私の「エジプト旅行」は終わらなかった。ヒエログリフを少しずつ勉強し、展覧会に足を運び、テレビ番組を録画し、新しい発見のニュースに一喜一憂している。医学の世界では、新しい知見によって昨日までの常識が変わることがある。考古学もまた同じなのかもしれない。一度否定された仮説であっても、新しい技術によって別の角度から検証され、思いがけない扉が開くことがある。

さて、ツタンカーメン王墓の「あの壁」の向こうには、いったい何があるのだろう。ネフェルティティなのか。それとも全く別の何かなのか。あるいは、期待したようなものは何もないのかもしれない。

それでも私は、次のニュースを楽しみに待っている。もし本当に「あの壁」が開かれる日が来たら――。

一度しか訪れていない王家の谷を、もう一度訪れる理由ができそうである。